

初の出会いは石垣島 (Sep. 1, 1994) : 帰路の海岸沿いの道にいつそう苛酷な試練が待っていた。台風の後波で真正面から強い向い風を受けての自転車こぎがそれは辛く、遅々として進まない。まわりに気をまぎらせてくれる蝶もいなく、前に進まなくては帰れない……。重いペダルを精一杯踏み込み、やがてバナナ岳が遠目に見えはじめる辺りにパインジュースの看板を出した休憩所があり、救われた気持ちで自転車をとめる。おバアとお嬢さんとが自前のジュースを造り、庭に並べたいかにも年季の入った木造テーブルでくつろいでいる。流れ出る汗をふきふきパインジュースを注文する。そのとき、パインの香りに惹きつけられたのかヒカゲチョウらしき姿がテーブルをかすめて飛び、やはり年季を感じさせる木造の椅子のかどに止まる。シロオビヒカゲだ。”石垣島にも定着したらしい”という事前調査での記事を思い出す。本種が確かに定着していると思える記録のひとつになるので完全体ではないけれども三角紙に納める。

西表島 (Sep. 18, 1999) : レンタカーの強みを発揮して古見の方へと移動する。古見は1995年11月3日に訪れて以来二度目。草地の周囲や隣のサトウキビ畑の周りには適度の竹やぶがあって古くからシロオビヒカゲの発生地として有名な場所だが、いきなりそのシロオビヒカゲが竹やぶから飛び出してくる。メスであることが分かる幅の広い白帯がくっきりと目に焼きつくがネットインできるようなやさしい飛び方ではない。そのまま竹やぶの薄暗い茂みにもぐりこんだと思うとラッキーにもはっきり目に見える場所にピタッと止まって動こうとしない。周りの竹がじゃまとなってネットが振れないのでVideoでの記録に専念する。うまくすればネットインできるかもと、むりやりネットを差し入れて下からすくい上げてみたが、チョウには見事にすりぬけられ行方不明となる。



白浜地区への移動後にもどった古見の草地をさらに踏み込んだ農道でアオタテハモドキを追っかけてみるが取り逃がす。こいつをさらに追ううちにサトウキビ畑横の竹やぶの端に突き当たる。午前中に取り逃がしたシロオビヒカゲがいてもいい環境だ。「夢よもう一度、しかしまさか」と思いつつ竹やぶを叩いてみる。するとどうだろう。なんとシロオビヒカゲが飛び出してきたではないか。これにはむしろビックリする。あいかわらず軌道の定まらない、どうすればネットに納められるかと戸惑う動きで、竹やぶから二畝ほど入り込んだサトウキビの根元に止まる。またしてもネットが使えない状況ではない。それでも近くまでいけば何とかなるだろうとサトウキビ畑に入り込む。とっさにサトウキビ畑にはハブが潜んでいる確率が高い、という定説が頭をかすめるが足が勝手に動いてしまう。そのとき、当方の動きを察知して再びシロオビヒカゲがせまいサトウキビ畑から飛び出してくる。その褐色と白の動きをめぐらして勘だけをたよりにネットを振る。と、どうやらチョウがネットに納まった様子。とたんに心臓が高鳴る。まちがいない。ネットの中にシロオビヒカゲが新鮮体そのまま納まっている。筆者にとっては3頭目だが完全体のメスは初めてでいい年をして嬉しくてたまらない。

石垣島 (Feb. 23, 2015) : 午前中にウスイロコノマチョウがいた林内草地を再度探索して思いもしないシロオビヒカゲが飛び出して興奮度最高潮となる。笹竹を叩いて本種の飛び出しを期待した午前中には全く姿を見せず、発生時期ではないのかと思っただけにこれは驚き。このチョウは夕刻以降に飛翔が活発となるが、昼間はあまり飛ばずにすぐにとまる習性があるので、どこにとまるのかと集中力を高めて注意する。止まったところは、撮影記録をとるのに好ましい位置ではないが、今一度飛ばれるとブッシュ奥へと逃げられるかもしれないので、静止位置を確認できた段階で近づきすぎて驚かさないよう注意しながら証拠記録撮影をする。

